

第三分科会

テーマ：複数の障害種への対応を考えた教育課程の工夫—教育課程編成に向けて、いかに学校の組織力・専門性を高め、効果的な指導の工夫をしていくか—

話題提供者

杉本 則子（岩手県立一関清明支援学校 副校長）

藤田 初代（福井県立嶺南西養護学校 教諭）

奥村さゆり（鹿児島県立出水養護学校 教諭）

講評

朝野 浩（立命館大学 教授）

司会

長沼 俊夫（国立特別支援教育総合研究所）

原田 公人（国立特別支援教育総合研究所）

第三分科会では、まず司会の原田氏より「複数の障害種に対応した教育課程の基本的な考え方や課題を話題提供し、参加者と共有する」という本分科会の趣旨説明が行われた。その後、上記三名の話題提供者からの報告があり、それぞれの話題提供後に参加者との質疑応答、続いて全体討議が行われた。最後に、朝野氏より全体を通しての講評があった。

杉本氏は、「4障がいに対応した授業の工夫と専門性向上に資する授業改善の試み」と題して、二校舎と三つの分教室の全校体制での校内授業研究会による授業改善、また障がいを超えた合同学習の工夫や適応障がいの生徒への授業の取組等、ろう学校と養護学校（病弱）が統合して2年目となる学校の取組を報告した。

藤田氏は、「学校の組織力・専門性を高め、効果的な指導をしていくための取組」と題して、個別の指導計画の作成、自立活動の指導の充実、外部機関との連携等によって、専門性や組織力の向上を図る取組を報告した。

奥村氏は「知的障害者と肢体不自由者が共に学び合える教育課程の編成をめざして」と題して、教育課程編成のための学校組織の効果的な活用の工夫や、複数の障害種における合同学習の工夫の取組などについて報告した。（以上、要項 p.43－p.49 参照）

<参加者との質疑応答>

質問者：（杉本氏へ） 学校統合の理由と必然性は何だったのか。

杉本氏：聴覚障害のある児童生徒の減少に伴い、ろう学校の校舎に養護学校の生徒が移動した、という経緯があつての統合。統合のメリットを教員が探り打ち出そうとしている。分教室は地域の学校で教育を受けさせたいという保護者の思いを県が汲み取って誕生した。岩手県は、「共に学び、共に育つ教育」を推進している。

質問者：（杉本氏へ） 校舎、学部、障害種が様々な状況でのワークショップ型の校内授業研究会はどのようなやり方なのか。

杉本氏：一年目は、全体場で各障がい種ごとの授業ビデオを見た後、ワークショップ型

で研究会を進めた。年度末に再び全体の場で授業改善のビデオを見て確認した。障がい種を超えた研修会が意識されている。

質問者：(藤田氏へ) 障害種の人数の割合について知りたい。また、外部機関との連携の際の旅費についてはどうしているのか。

藤田氏：小学部は知的 9、肢体 4。中学部は知的 11、肢体 1。高等部は知的 27、肢体 4、病弱 7。合同授業について、小学部は音楽、中学部では音楽と体育で行っている。旅費については支援会議のための旅費という内訳はない。外部から本校に来てもらうことも多い。盲学校、ろう学校はそれぞれのサテライト教室があり、その一環で来てもらっている。

質問者(藤田氏へ) 自立活動と各教科等の関連の取組について、計画や評価のタイムスケジュールはどのように行っているのか。

藤田氏：教科は三学期制で学期末に見直しを行う。実態把握の取りなおしとそれに関する自立活動の目標の見直しについては、今年度の教員で来年度の検討を行い、指導の継続性を測るようにしている。

質問者：(奥村氏へ) 通学バスがあり時数の確保が課題と思われる。1 単位時間は何分か。

奥村氏：通学バスは 15:20 に発車。1 単位時間は今年度まで 40 分。来年度以降 45 分×6 時間で実施できるよう校時表の見直しを行っている。

<全体協議>

司会者：参加者より自校における教育課程の課題や工夫など、情報提供をしてほしい。

参加者：大学進学を目指した児童生徒が入学した場合の、教育課程上の配慮が課題である。

藤田氏：基本的には高等学校に準ずる教育をマンツーマンで実施。近隣の高等学校に自ら進路情報を聞きに行くなど、自校で取り組めない部分は高等学校と関わりを持って行う。

参加者：通常学級の担任。交流に関する普通学校への要望は何であるかを知りたい。

杉本氏：小学部の段階から居住地校交流、本校舎では意図的な前籍校交流を行う。小中学校の中にある千厩分教室では、支援方法等について事前にペーパーを作って通常学級の先生と交換し、スムーズな交流及び共同学習ができています。

藤田氏：小中学部において居住地校交流。本校は児童生徒数が少なく、同年齢の友達同士の関わりが少ない。知的に最重度の肢体不自由の児童が、交流の際、同学年の児童と触れ合う中で笑うなど意義を感じる。保護者が希望した場合、快く受け入れてくれることがありがたい。

奥村氏：小中学部における居住地校交流。高等部では地域の 2 校と交流があるが、生徒の中には、地元の友達に養護学校にいることを知られたくない等、実施の方法や内容等に課題が多い。

<講評>

前京都市立西総合支援学校長の朝野氏より、京都市の総合支援学校における教育課程、学校組織の改編の知見をベースに、全体会及び分科会の内容を整理しながらの講評があった。類型ではなく一人一人の教育的ニーズと活動内容に焦点をあてた学校全体でのカリキ

ュラム開発、チームとしてお互いの仕事が見える組織体制の改編の視点等が提示された。

<まとめ>

司会の原田氏より、教育課程に関する用語の統一、実態把握に関する評価基準と専門性、軽度知的障害の生徒増加への対応、指導計画・支援計画を通じた保護者との連携、国レベルでの障害についての捉え方と教育課程との関連など、今後の課題が示された。